

ウイグル伝統音楽における音程移行パターンの比較研究

淑瑠 ラフマン (人間社会環境研究科 客員研究員)

筆者は今までウイグル伝統音楽に関するウイグル伝統音楽における音程変化の移行パターンを中心に研究を行ってきた。特に、新たな発想で生まれた測定法を用いて、いくつかの知見を得ることができた。第一に、ウイグル伝統楽器に対する周菁葆 (1987) 等の旋法測定と私が行った測定と比較した結果、数多くの矛盾が存在することに気づき、それらを具体的なデータで証明することができた。第二に、ラフップ演奏者3人にラフップの調律、演奏を依頼し、曲を演奏しないで格フラットを押す時と曲を演奏した時とで、基本周波数にかなりの差が存在することが明らかとなった。第三に、7つのウイグル人居住地を代表する7つの曲を選び、それらに含まれる音程関係をグラフ化した。またそれらを80年代ウイグル作曲家の作品、バッハのキャノン、中国浙江省の伝統音楽などと比較した結果、それぞれの音程変化の移行パターンで違いを視覚的に表現することができた。

これから音の測定による民族音楽の旋法研究方法に重点を入れて、ウイグルだけにとどまらず隣接地域や世界各地の民族音楽にこの研究方法を応用して行かなければならない。

本研究目標を進展させるためには本来ならば関連する多くの国や地域を訪問し、現地で取材を行う必要があった。しかし、様々な条件や資金面で限りがあった。なかなか実現出来なかった。今回の訪問によって、長時間にわたってこれらの地域で研究を行ってきた Stephen Blum 教授をはじめとする多くの研究者が蓄積したデータを入手することが出来た。これは私自身が今まで乗り越えることが出来なかった壁を突き破って、とても貴重かつ期待以上に多いデータを集められる広い道を開いてくれた。また、移民社会と言われている米国でこれほど多くの伝統芸人らと会えると夢にも思いませんでした。現地に行ってからそれを通観した上で、聞き取り調査も同時に出来たことは非常に幸運に思う。

1. 調査日程、訪問先、内容

1) 日程：3月27日～4月23日

Stephen Blum 教授の研究室には長時間にわたって蓄積されてきた世界各地の伝統音楽に関するアーカイブがあった。今回の訪問では彼らの協力によってウイグル伝統音楽と関わりがある中央アジア諸民族伝統音楽に関連する音声、動画ファイルを探し出した。その中から音声、画像ファイルなど合わせて433件のファイル収集することが出来た。

2) 日程：4月26日～5月21日

Stephen Blum 教授のご協力のもとで当大学の図書館や各研究室などにあるウイグル、トルコ、ウズベク、イラン、コルド、タジックなど民族の伝統音楽に関する1056ページに及ぶ楽譜、文章資料、統計データを収集した。

3) 日程：4月、16日、28日； 5月8日、13日27日

滞在期間中にニューヨーク市にあるニューヨークトロキッシュカルチャーセンター (Turkish Cultural Center New York) を訪問し、Emre Puskulluoglu, Muhammad Kilic など方々のご協力で当センターに保存されている音声ファイル57件、画像ファイル11件、楽譜、文章資料144ページを収集した。また、当センターの主催で行われた交流イベント3件に参加し、ビデオ撮影を行った。

4) 日程：4月10日、11日、24日； 5月15日、22日、23日29日

ニューヨークに住む友人らの協力でマンハットン、クヴィンズ、ブロクリンなど地域で活動を行っている中央アジア系移民音楽家を探し出し、聞き取り調査や16時間に及ぶ実演録画に成功した。

5) 日程：6月1日～6月10日

本訪問では Richard Wolf 教授のご協力のもとでハーバード大学音楽図書館に保存されている他のところで見つかり難い中央アジアの諸民族音楽における貴重な654ページにおよぶ楽譜、文章資料、統計データを収集した。また、Richard Wolf 教授の研究室に保存され

ているかなり古い段階の中央アジア伝統楽器などの写真撮影を行った。さらに、彼が1990年にウイグル地域で行った取材データを提供してくれた。

6) 日程：4月14日、15日、21、22； 5月12日、13日、26日、28日

今回の訪問期間中に、Stephen Blum 教授、Richard Wolf 教授ら以外にコロンビア大学の George E. Lewis 教授、ニューヨーク市立大学の David Olan 教授、David Levine 教授、当大学博士課程の Ozan Aksoy、Josh、Patric Rivers、George Mcker など研究者らとお会いして、私の研究テーマについて意見交換を行った。彼らは本研究の発想に高く評価した上で、グラフの設計や正確性に関する欠けている部分に対して厳しい意見を寄せられた。改善すべき点をしっかりと示され、今後の研究に全面的に協力する姿勢を示した。

2. 調査の成果

ウイグル伝統音楽における音程変化の移行パターンをもっと探るために、今回収集してきたデータの基で分析を行った。その方法として、ウイグル伝統音楽と密接な関係があると言われているイラン、トルコ、ウズベクなどの伝統音楽の中の「ムカム」という古典音楽ジャンルに絞って金沢大学文学研究科の林智氏が作った音曲を解析するプログラム W-Energy を利用し、各民族ごとに曲全体の状況をグラフで提示する。

以下ウイグル伝統音楽と密接な関係があると言われているイラン、トルコ、ウズベク、などの伝統音楽音程変化の移行パターンを示す。

分析

以上図形では縦軸は使われた音程の回数を表す。横軸は音程を表す。色は曲を表す。今回は格民族から3つの曲を選定し分析を行った。図形から以下のいくつかの点を読み取ることが出来る。

第一に、ウイグル、イラン、トルコ、ウズベクなど伝統音楽では図で表したように非常に狭い範囲での音程移行パターンを多く使われていることが分かる。西洋のクラシック音楽では一般的に様々の音程移行パターンを幅広く使われるのに対してこれらの音楽では完1、

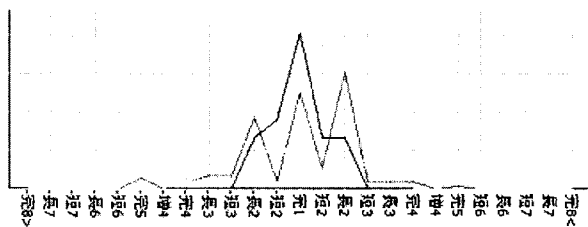


図1 ウイグルムカム

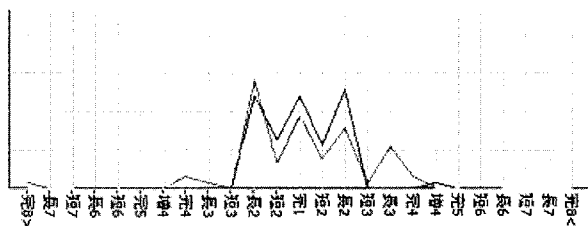


図2 イランムカム

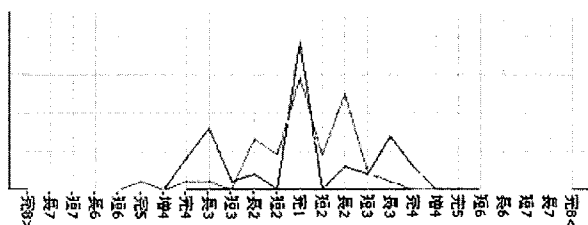


図3 トルコムカム

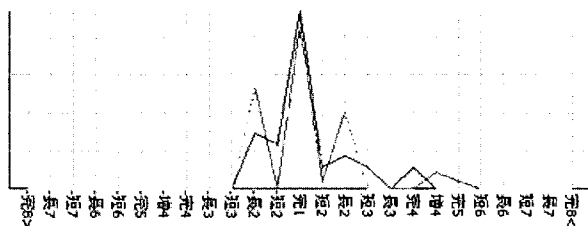


図4 ウズベックムカム

短2、長3などといった狭い範囲内の音程移行パターン多くみられる。そのため、音楽的印象は同じく感じられる。したがって、この類の音楽はアラブ・ペルシャ系音楽と称されている。

多くの研究者はアラブ・ペルシャ系音楽の特徴は完1度音程の中で微妙に変化する中立音程だと考えてきた。しかし、中立音程を出せないピアノなどの楽器でアラブ・ペルシャ系音楽を演奏した場合でも、印象は変わらない。勿論、リズムカルな面も印象に影響を与える要素だが、リズムを変更して現代的ポピュラー音楽にアレンジした場合でも、アラブ・ペルシャ系音楽的な雰囲気を明らかに感じられる。

以上の視点から考えると音楽における印象は音程移行パターンと密接関係あるのではないかと考えている。一旦、音程移行パターンが崩れる音楽の印象も大きく変わる。これを実践で試すために、研究者らまとめた

アラブーペルシャ系音楽の音階を変わずに、西洋音楽のように幅広い音階を使って演奏した結果、別のタイプの音楽の印象を与える。

多くの研究者は民族音楽の特徴考えるときにリズムや音階といった面に重視し、その音程移行パターン無視してきた。今回実践から音楽特徴決定づける過程で音程移行パターンは非常に重要な要素であること実証している。

第二に、ウイグル音楽とイラン、トルコ、ウズベク音程移行パターン比較してみよう。図形であらわしたように、イランムカムの場合、音程移行パターンは各音程で平準的に移行しているのに対して、ウイグル、トルコ、ウズベクなどのムカムの場合、音程移行がバラバラで、音程移行は特定音程において多く使われていることが分かる。特にウイグルムカムとウズベクムカムがよく似ている。

このような結果からウイグル伝統音楽はイラン伝統音楽よりも言語や血縁的に同じルーツを持つトルコやウズベクなどの伝統音楽に近いことが分かる。

ウイグル人は長い歴史の中で中央アジア中心に文化交流、商業、人々移動（移住）など様々な活動を行ってきた。その過程で様々な異文化の影響を受けつつ、古くからのトルコ系民族として文化基盤保ちながら今に辿り着いた。音楽文化においても同じような傾向を示している。ウイグル伝統音楽の音程移行パターンとイラン、トルコ、ウズベクの伝統音楽の音程移行パターン比較分析の結果、狭い範囲での音程移行特徴はイラン伝統音楽と同じだが、トルコ系民族固有の特性があることが明白になった。

第三に、音楽における音程移行パターンを分析する手法は初期段階なので確信できない面もあった。しかし、今回の訪問から得たデータの分析結果が思った通りの良い成果が表れたので、自信を持って幅広く適応して行きたいと思う。

3. 今後の展望

1. 今回民族音楽学領域において多くの経験豊富な学者らと交流することによって、本研究にとって貴重な意見を得た。また、彼らとの連携関係が生まれた。彼らの意見は私に自信を与え、欠点に対する指摘を真摯に受け止めるとともに改善して行くことにより国際的に一層高いレベルの研究成果を出して行く。

2. 今回の訪問を通じて収集されたデータは日本国内でも珍しいものと確信している。これらのデータを何らかの形で日本の研究者にも提供して行きたいと考えている。
3. 今回主に収集した資料は文献、楽譜、音声など三つに分けられる。帰国した後、文献資料を詳しく読んで、自分の知識を広げた上、楽譜資料に対する分析を行った。音声資料はまた手を着いていない状態である。これから今回の結果を踏まえて、音声資料に対しても分析を行って研究結果出していきたい。
4. 音の測定よって行われて研究は世界各地この成果によって数多くの興味深い話題が生まれてきている。これから民族音楽学分野でこのような方法を繰り広げる必要性があると考えている。初期段階にいることや時間やより広い知識が不足しているため、多くの非常に興味深い研究課題残っている。これから以下のいくつかの点を重点に入れて行きたい。

1) ウイグル音楽歌唱時の発声のメカニズム

音楽における旋法の測定は、**楽器構造**（楽器の各部分を数学的に測定する）、演奏時の旋律構造、歌唱時の旋律構造という三つの側面から行なわれる。このうち前二者についてはすでに測定を行っており、演奏時の音律構造に変移が起こることを見出している。これからは、歌唱時の旋律構造の測定を進めながら、発声の音声生理学的メカニズムを解明する。従来、歌唱の発声法には、国や地域によって差異があることが知られているが、それが音声生理学的にどのように異なるのかを明らかにする。

2) 伝統音楽における民族差と地域差及び相互影響

“音程変化の移行パターン”に関する研究を深化させるため、新疆ウイグル自治区に隣接する中国西北地方と日本の民謡についてこれまでより広い範囲で音声データを収録する。それらの“音程変化の移行パターン”を量的に分析することで、伝統音楽における民族差と地域差及び相互影響を解明する。

参考文献

- アブドシュクル・ムハメトイミン『ウイグルムカムの宝庫』
Abdushukur Muhammad Imin[Uyghur Mukam Ghazinesi, 1997
年、新疆大学出版社

- 阿布都西庫尔・阿不都熱合曼 「ウイグル社会における音楽の近代化、人々の音楽に対する意識と行動に関する研究」『人間社会環境研究』15号 pp.1-17 2008年3月
- アラン・P・メリアム著／藤井知昭・鈴木道子訳、『音楽人類学』、1980年、音楽之友社
- クルト・ザックス著／ヤーブ・クンスト編 福田昌作訳 『音楽の源泉 民族音楽学的考察』、1970年、音楽之友社
- 小泉文夫 『音楽の根源にあるもの』2001年8月 平凡社
- Rachel Harris 『The Making of a Musical Canon in Chinese Central Asia: The Uygur Twelve Muqam』 Ashgate Publishing Limited 2008
- ステイブ・フェルド著／山口修・山田陽一・ト田隆嗣・藤田隆側訳 『鳥なった少年』
- Jarring .Gunnar 「Materials to the Knowledge of Eastern Turki; Tales, Poetry, Proverbs, Riddles, Ethnology and Historical Text s from the Southern Parts of Eastern Tukestan, with Translations and Notes」『LUNDS UNIVESITETS ARSSKRIFT N..F Avd 1. Bd 26 Nr7』 1946-51
- 『Regionale maqam-Traditionen in Geschichte und Gegenwart』 STUDY GROUP OF THE ICTM 1992
- Bruno Nettl 『MAKAM modal Practice in Turkish art Music』 DA CAPO PRESS. 1986
- Sabine trebinjac 『INTRODUCTION AU MUQAM OUIGOUR』 INDIANA UNIVERSITY RESEARCH INTITUTE FOR INNER ASIAN STUDIES 1991
- Sabine Trebinjac 『Le pouvoir en cbantant』 TOME1 societe d'etvnologie 2000
- Nathan Light 『Intimate Heritage Creating Uyghur Muqam Song in Xinjiang』 Max Planck Intitute for social Antropology
- 『Traditonal Persian Art Music The radif of Mirza Abdullah
- Bela Bartok 『Turkish Folk Musik From Asia Minor』 Princeton Univesity Press 1976
- Kemal Ilerici 『Turuk Muzigi ve Armonisi』 Milli Egitim Basimevi- 1979
- Stephen Blum 『Ethnomusicology and Modern Music History』 Univ of Illinois Pr; Reprint 1993/06